深谷　断層崖の宿場町とレンガ工場、ネギ畑

①滝宮神社・深谷断層（●資料参照）

深谷市のＪＲ深谷駅南口のすぐ近くにある神社で、その昔この地に現れた湧き水が様々な幸を授け、神様からの地と崇められてきました。その後唐沢川の谷に流れ落ちる様子を瀧に因んで「瀧の宮」と称して神社を祀ったそうです。桜の名所としても知られている場所です。

＜深谷断層＞

埼玉県には群馬県の高崎から深谷、熊谷、上尾にかけて顕著な活断層帯があることが知られている。そのメンバーのひとつが深谷断層である。

深谷断層は、熊谷市三ヶ尻から岡部町岡まで続く活断層で、荒川の扇状地を北西～南東に切るようにのびていて、段丘地形のずれから位置および変移速度が推定される。そのずれは深谷市緑ヶ丘から西の６～８万年前の櫛引面では比高８～１４ｍ、緑が丘から東の１．５～２万年前の御稜威ヶ原面では比高５～６ｍの段差を持ち、北下がりになっている

東京駅を模した深谷駅を出るとすぐ南に深谷断層がある。駅から南に下台池公園に向かうとその途中に坂を下ってくる車道がある。これは深谷断層の断層崖（撓曲崖）を崩した坂である。そのすぐ東に断層崖からの湧水で作られた下台池が見られる。池の周辺は整備されているが、その一角に現在でも水が出ている部分がある。

滝宮神社は断層崖の段差を利用して作られた神社でその上下の比高差は１０ｍに達する。この神社には断層崖からの湧水を水源とする池があり現在でも湧出している。

深谷断層と断面図

活断層の活動度は以下のようにＡ級、Ｂ級、Ｃ級にわけられる。

Ａ級　１０００年あたり１ｍ以上１０ｍ未満

Ｂ級　１０００年当たり１０ｃｍ以上１ｍ未満

Ｃ級　１０００年当たり１ｃｍ以上１０ｃｍ未満

これによると、深谷断層はＢ級の活断層である。

また深谷断層の南西に別の断層帯に属する櫛引断層があ

り、１９３１年に起こった西埼玉地震はこの断層周辺が活動したと推定されている。（この項所沢北高の坂井、橘の両先生による）

②お助け普請･大谷邸

1929 年の世界大恐慌に深谷では、当時の輸出産業の織物産業が多かったので失業者が多くなった。これに当時町長だった大谷藤豊（ふじとよ）氏が救貧の為、仕事で幅広い分野に素早くお金を届ける事ができる建築がいいだろうと造られた家で、お助け普請といわれ１００人の職人が２年間費やして造った。玄関はタイル貼り、正面に和風のステンドグラス、黒柿の障子は障子紙を中央に貼って両側から桟（さん）で挟んだ凝った作りをさせた。国の有形文化財になっている。

③見返りの松・東常夜灯

東の常夜燈は、現在の稲荷町にある。明治初頭に建てられた。これを建てたのは、江戸時代中頃から盛んになった富士構の人たちで、この構の印である（三）が燈身に透かし彫りになっている。「見返りの松」は国道 17 号（写真右側）と旧中山道（写真左側）の交差点（深谷市原郷）に現存しています。江戸時代、深谷宿では「飯盛り女」と呼ばれる遊女が置かれ、宿場のはずれにあるこの松のから宿場の方を振り返り、前の晩の遊女との別れを惜しんだ旅人も多かったことから、「見返りの松」と呼ばれたようです。

１７号新道開通のころの見返りの松©古今東西舎

④深谷商業高校旧校舎

深谷商業高校は地元の有力者である渋沢栄一や大谷藤豊などの努力により、1921 年（大正 10 年）4 月に開校した。校舎はフレンチ・ルネサンス様式を基調とした和洋折衷の木造 2 階建校舎で、1922 年（大正 11 年）4 月に完成、県内で唯一、完全な大正期の木造校舎となっている。建物の老朽化が深刻な状況であったため、2011 年（平成 23 年）から保存修理工事が実施されることとなった。復原調査で創建当時の外観は修復前の白色系ではなく三緑色であったことが判明し、当時の色彩である三緑色で復元した。2000 年（平成 12 年）10 月 18 日に国の登録有形文化財に登録された。

⑤煉瓦工場引き込み線跡遊歩道「あかね通り」・旧福川橋梁・ブリッジパーク

工場は利根川の支流小山川に面しており製造された煉瓦は舟運により小山川から利根川そして江戸川に入り東京に至るというルートをとっていたが、輸送力向上を目的として 1895 年（明治 28 年）に日本鉄道の深谷駅から工場までの約 4.2km にわたって専用鉄道が敷かれた。

本路線は廃線となった後、線路が撤去され、歩行者と自転車が通れる遊歩道「あかね通り」になっている。近くにあるブリッジパークには、この路線で使用されていた福川鉄橋が保存されている。

日本煉瓦製造株式会社で製造したレンガを輸送するために、明治 27 年から深谷駅と工場間の引込線の建設が始まった。福川鉄橋は、福川本流にかかるプレート・ガーダー橋と、北に隣接する水田にかかるボックス・ガーダー橋で構成される。現在は、福川に沿った公園内に移設されている。特に、プレート・ガーダー橋は、イギリス人鉄道技師ポーナルが作成した橋としては、現存する日本最古(明治 28 年)のもの。

⑥煉瓦工場

明治政府は臨時建築局を設置し、ドイツ人建築家のヴィルヘルム・ベックマンとヘルマン・エンデを日本に招いた。彼らは都市整備のため良質な煉瓦製造工場が必要であることを明治政府に進言した。これにより渋沢栄一らによって日本煉瓦製造が設立され同工場が埼玉県榛沢郡上敷免村（現在の深谷市上敷免）に建設された。日本煉瓦製造はドイツ人技師チーゼを招いて 1887 年（明治 20 年）に操業を始めた。日本初の機械式レンガ工場であった。

後に太平洋セメントの子会社となるが、2006 年株主総会において自主廃業を決定、清算された。重要文化財に指定された「ホフマン輪窯」「旧事務所」「旧変電所」などの所有権が深谷市に移転、同市によって保存・整備される。

⑦清心寺・平忠度の墓

一ノ谷合戦で平忠度を討ち取った岡部六弥太忠澄（ただずみ）は故郷岡部に凱旋し、忠度の死を悼み五輪塔を建て供養したという。これが埼玉県深谷市の清心寺（浄土宗）にある忠度の墓と伝えられています。

岡部氏の本拠地岡部村は、昔「岡部」と「普済寺」とで一つの村で、2006 年の市町村合併により、深谷市の一部に組み込まれるまでは大里郡岡部町でした。

＜（萱場村）清心寺＞
浄土宗、下総国岡田郡飯沼村弘経寺末、石流山八幡院と号す。寺領八石は慶安二年御朱印を附らる。当寺の起立は天文十八年二月なり。開山萬誉玄仙慶長十年正月七日寂す。開基は上杉氏の老臣岡谷加賀守清英、法名は皎月院円誉清心居士、天正十二年十一月八日卒す。按に谷野村皎心寺もこの人の開基にして、そこの傳へには、元亀年中の卒といひ又過去帳に加賀守法名安仲皎心庵主十五日とも記せり。かくまちまちの傳へあるが上に、当寺に傳る所は卒年も法諡も差へり。いづれが正しきや、本尊弥陀を安ぜり。
忠度桜。
本堂の艮にあり。梢まで高二尺ばかり。地づらより四本に分れたり。四本を合すれば一囲みに余りたれど、分れし一枝は僅に二尺巡りにすぎず、花は薄紅にてしへなく、中に葉二枚ありと云。此木の下に忠度が墓とて古き五輪の塔立り。高三尺許、台石に梵字を彫付たり。又側に青き板碑一基あれど、これも阿字のみ彫れり。相傳ふ岡部六弥太忠澄薩摩守忠度を討し、後其菩提の為に当所に墓を立、此桜を植しと云、されど其頃植たる木とも見えず、後人忠度が桜花の和歌の意により植しものなるべし。（新編武蔵風土記稿より）

＜平忠度＞天養元年（1144 年）伊勢平氏の棟梁である平忠盛の六男として生まれる。母は藤原為忠の娘（異説として原高成の女とも[2]）。紀伊国の熊野地方で生まれ育ったと言われており、熊野別当湛快の娘で湛増の妹でもあった女を妻としたこともあったようである。
治承 2 年（1178 年）従四位上。治承 3 年（1179 年）伯耆守。治承 4 年（1180 年）正四位下・薩摩守。
歌人としても優れており藤原俊成に師事した。平家一門と都落ちした後、6 人の従者と都へ戻り俊成の屋敷に赴き自分の歌が百余首収められた巻物を俊成に託した。『千載和歌集』に撰者・俊成は朝敵となった忠度の名を憚り「故郷の花」という題で詠まれた歌を一首のみ詠み人知らずとして掲載している。

さざなみや 志賀の都は 荒れにしを 昔ながらの 山桜かな
— 千載集六十六

『千載和歌集』以降の勅撰和歌集に 11 首が入集。なお、『新勅撰和歌集』以後は晴れて「薩摩守忠度」として掲載されている。 源頼朝討伐の富士川の戦い、源義仲討伐の倶利伽羅峠の戦い等に出陣。一ノ谷の戦いで、源氏方の岡部忠澄と戦い 41 歳で討死した。『平家物語』によると源氏に紛れる作戦をとっていたが、源氏の多くが付けていないお歯黒を付けていたので見破られた。忠度は明石を経て現在の兵庫県神戸市長田区へ向かい、そこから逃走用の船を得ようとしたが途中で忠澄に討たれた。現場は現在の明石市天文町付近で、忠度と忠澄が戦ったことにちなみ、「両馬川」と呼ばれた。その時箙（えびら）に結びつけられたふみを解いてみると、「旅宿の花」という題で一首の歌が詠まれていた。

行（ゆき）くれて木（こ）の下かげをやどとせば花やこよひのあるじならまし

平忠度公墓（深谷市清心寺）
忠度が討たれた際、「文武に優れた人物を」と敵味方に惜しまれたという。戦後、忠澄は忠度の菩提を弔うため、埼玉県深谷市にある深谷駅南口の清心寺に供養塔を建立している。 明石市には、忠度の墓と伝わる「忠度塚」があり、付近は古く忠度町と呼ばれていた（現・天文町）。また忠度公園という小さな公園もある。神戸市長田区駒ヶ林には、忠度の腕塚と胴塚がある（神戸市認定地域文化財）。
唱歌「青葉の笛」（大和田建樹作詞、作曲・田村虎蔵）の二番は、『平家物語』巻七「忠度都落ち」と巻九「忠度最期」の二場面を、続けて歌っている。即ち一度都落ちした忠度が京に取って返して歌の師・俊成に、近々編纂される勅撰和歌集のために自分の歌を託した事と、一の谷で忠度が討たれた時（「今はの際間」）に箙の中に残っていた歌が、「花や今宵の主ならまし」であった事を歌っている。

更くる夜半に 門(かど)を敲き
わが師に託せし 言の葉あわれ
今わの際まで 持ちし箙に
残れるは「花や 今宵」の歌
唱歌「青葉の笛」

平忠度（小林清親画）

諱が「ただのり」であることから、忠度の官名「薩摩守」は無賃乗車（ただ乗り）を意味する隠語として使われる場合がある。狂言『薩摩守』では渡し舟に乗り、「平家の公達、薩摩守忠度」と言って舟賃を踏み倒そうとする僧が登場しており、かなり古くから知られた語呂合わせであったと見られる。
能『忠度』では、忠度の霊が千載集の「読み人知らず」とある我が歌に作者名を入れよと、俊成の子である定家に訴えるよう、旅の僧となった俊成の家来に頼む姿が描かれている。ちなみに定家は『新勅撰和歌集』において以下の歌を「薩摩守忠度」の名で選んでいる。この歌は女性の立場で詠んでおり、「つもり」が「津守（地名）」、「恨みても」が「浦見ても」、「待つ」が「松」の掛詞となっている。

たのめつゝ こぬ夜つもりの うらみても まつより外の なぐさめぞなき— 新勅撰和歌集 巻第十三 恋歌三 854

●深谷宿

深谷宿は、中山道六十九次（木曽街道六十九次）のうち江戸から数えて 9 番目の宿場。
現在の埼玉県深谷市にあたる。深谷宿は中山道で最大規模の宿場で、本陣 1（飯島家）、脇本陣 4、旅籠 80 余。商人が多く、また飯盛女も多く、遊郭もあり、江戸を出立

して 2 番目の宿を求める人で大いに栄えた。 五の日、十の日に市が立った。（壬戌紀行）
天保 14 年（1843 年）の『中山道宿村大概帳』によれば、深谷宿の宿内家数は 525 軒、うち本陣 1 軒、脇本陣 4 軒、旅籠 80 軒で宿内人口は 1,928 人であった。

⑧西常夜灯

深谷宿の東西の入り口にあたる場所に立っている。 高さはいずれも約 4m もあり、中山道で最大級のものである。西の常夜燈は、現在の田所町にある。天保 11 年（1840）建立。

県内宿場の旅籠の数(天保年間)			桶川	３６	１０里
蕨	２３	江戸より４里	鴻巣	５８	１２里(箕田)
浦和	１５	６里	熊谷	１９	１６里
大宮	２５	７里	深谷	８０	１９里
上尾	４１	９里	本庄	７７	２１里

※当時の人々が 1 日に歩く距離は長くて平地で１０里(40km 弱)程度。江戸四宿の板橋(旅籠５４軒)を起点とすると、上尾桶川鴻巣と深谷本庄に旅籠の数が多くなる。

⑨滝沢酒造

1863（文久 3）年に比企郡小川町から移住し、酒造を創業した。当初は母屋と本倉だけであったが、必要な施設を次々に煉瓦で建てた。特に目立つのが丸形の煉瓦造大煙突である。1931（昭和 6）年の地震で先端部分が崩れ、第 2 次大戦時に機銃掃射をうけたものの、現在でも深谷市街を代表する建造物の一つとなっている。この丸形煉瓦煙突は関東地方では唯一原型に近い構造を保っている煙突である。特に、保温性と保湿性に優れた煉瓦製の麹室は、繊細な温度管理を求められる麹造りに最適であり、荒川水系の伏流水は発酵に有利な硬水で、麹が乾燥しやすい冬の気候も、すっきりとした酒の製造に向いている。

⑩深谷シネマ

深谷シネマは、埼玉県深谷市にある映画館（ミニシアター）である。映画館を維持管理しているのは、NPO 法人「市民シアター・エフ」で埼玉県北部に存在する唯一のミニシアターである。2002 年 7 月 27 日、銀行店舗の跡地を改装してオープンしたが、2010 年 4 月 16 日、町の区画整理事業のため、それまでの深谷市仲町から、深谷市深谷町の七ッ梅酒造跡に移転して再オープンした。座席数も 57 席に増え、映写機などの設備もリニューアルした。全国で唯一の造り酒屋を改装した映画館である。敷地内には、飲食店やお茶屋・古本屋など関連店舗、入居企業もあり、映画を楽しんだ観客が歓談するスペースやワーキングスペースとなっている。またドラマや映画作品のロケも数多く行なわれている。
2013 年 8 月、デジタルシネマシステムが導入されたが、フィルム映写機も引き続き設置され、過去のフィルム作品も上映できる環境となっている。
年間入場者は 2 万 3000 人程度あり、ボランティア 10 人が運営の中心となっている。深谷シネマの活動が核となって、深谷市では 2004 年から映画祭が開催され、映画やテレビドラマのロケーション撮影誘致も年 50 本程度に達している。

⑪本陣跡

深谷宿の本陣職は、当初、田中万右衛門(現、深谷市田中正太郎先祖）が担っていた。その後、宝暦 2 年(1752)代官今井平三郎のとき、条右衛門（飯島家 9 代）が引き受けたといわれる『旧中山道 榛澤郡 深谷宿 本陣遺構』（飯島家、2011)。一方、『深谷市史』によれば、飯島家(飯島邸)が本陣職を引き受けたのは宝暦 6 年(1756)、引き継いだのは十郎兵衛(現、深谷市飯島義作先祖）だとあり、混乱が見られる『深谷市史』(p502)。寛政 12 年(1800)の書上帳によると、深谷宿の本陣は 1、脇本陣は 4 となっている。天保 14 年(1843)の『中山道宿駅宿勢一覧』でも、深谷宿の本陣は 1、脇本陣は 4 となっている。

⑫深谷城址

康正 2 年（1456 年）に深谷上杉氏の上杉房顕が台地の北端部付近に築いたものである。天正 18 年（1590 年)、豊臣秀吉の小田原征伐で開城するまで、深谷上杉氏の居城であったが、徳川家康の関東入部に伴い、長沢松平家の松平康直が 1 万石で入城した。その後、家康の七男松千代、兄の六男忠輝が継いだ。しかし、忠輝は慶長 7 年（1602 年）に下総佐倉へ転封となり、慶長 15 年（1610 年）に桜井松平氏の松平忠重が入封したが（『寛永諸家系図伝 第一』 続群書類従完成会によれば、「8 千石を領ず」と記される)、元和 8 年（1622 年）上総国佐貫へ移封された。その後酒井忠勝が 1 万石を領有して入封したが（『寛永諸家系図伝 第一』に「7 千石を加えて給わって、深谷城を領ず」とある)、寛永 4 年（1627 年）に武蔵国川越へ移封となり、深谷藩は廃藩となり、寛永 11 年（1634 年）に廃城となった。

●つかもと燃料様のレンガ蔵と街並み絵図

<つかもと燃料「我が家のうんちく」より>

＊建立日：大正元年建造 創業は明治初期 武州近江屋 元禄年間に近江から深谷入り

＊建築名称英国穫みレンガ様式伝統的な日本建築とレンガによる西洋建築の組み含わせた町屋建物

＊建築形式：防火壁及び『うだつ」導入、下部には隅石(花商岩)を設置二層三階建 間口約５間 以前、庭先には聾え立つ煉瓦の煙突がありました!

＊建設業者：鈴木工務店(深谷市伸町)代表 鈴木安太郎

＊建築総工費：３万円(口伝)

＊施主：塚本榮平(47歳)榮一翁より、自らの孫へ「榮一」御名を拝命する。

＊詳細：榮平は当時、渋沢栄一翁が経営する日本煉瓦製造株式会社に燃料用の石炭を納めていた縁と、火災による類焼防火性にレンガは最適と考え、これを使用する。深谷市内にて現存しているレンガ造では最も大きい建物＝東京駅と同じ煉瓦！

深谷宿家並絵図(市指定文化財)より

●深谷断層について（平成１７年３月９日 地震調査研究推進本部 地震調査委員会）

関東平野北西縁断層帯の評価

関東平野北西縁断層帯は、関東平野北西部と関東山地との境界付近から大宮台地北部にかけて分布する活断層帯である。ここでは、平成７、１０、１１年度に埼玉県、平成８、９年度に群馬県、平成１０－１２、１５年度に産業技術総合研究所（旧：地質調査所）及び平成１５年度に文部科学省研究開発局ほかにより実施された調査をはじめ、これまでに行われた調査研究成果に基づいて、この断層帯の諸特性を次のように評価した。

表1 関東平野北西縁断層帯主部の特性

項　目	特　性	信頼度（注3）	根　拠（注4）
1．断層帯の位置・形態			
(1)断層帯を構成する断層	深谷断層、綾瀬川断層(北部)*、江南(こうなん)断層		文献5、9、21による。*伊奈町以北の区間。
(2) 断層帯の位置・形状	地表における断層帯の位置・形状 断層帯の位置 (北西端)北緯36°23′ 東経138°51′ (南東端)北緯36°00′ 東経139°38′ 長さ　約82km	 △ ○ △	文献5、9、12、21、24による。位置及び長さは図2から計測。
	地下における断層面の位置・形状 長さ及び上端の位置　地表での長さ・位置と同じ 上端の深さ　0km 一般走向　N60°W 傾斜　50°－70°南西傾斜(深さ500m以浅) 幅　20－25km程度	 ◎ ◎ ◎ ○ ○	上端の深さが0kmであることから推定。 一般走向は、断層の両端を直線で結んだ方向(図2参照)。 傾斜は文献17、18、23などに示された反射法弾性波探査結果から推定。 幅は、傾斜と地震発生層の下限の深さ(約20km)から推定。
(3) 断層のずれの向きと種類	南西側隆起の逆断層	◎	文献17、18、23に示された資料や地形の特徴から推定。
2．断層帯の過去の活動			
(1) 平均的なずれの速度	0.2－0.4m／千年程度(上下成分)	△	文献10、11、13、17－19、28に示された資料から推定。
(2) 過去の活動時期	活動1(最新活動) 約6千2百年前以後、約2千5百年前以前	△	文献12に示された資料から推定。説明文2.1.2(2)参照。
(3) 1回のずれの量と平均活動間隔	1回のずれの量　5－6m程度(上下成分) 平均活動間隔　1万3千－3万年程度	△ △	断層の長さから推定。説明文2.1.2(3)参照。 平均的なずれの速度と1回のずれの量から推定。
(4) 過去の活動区間	断層帯全体で1区間	△	断層の位置関係、形状などから推定。
3．断層帯の将来の活動			
(1) 将来の活動区間及び活動時の地震の規模	活動区間　断層帯全体で1区間 地震の規模　マグニチュード8.0程度 ずれの量　5－6m程度(上下成分)	△ △ △	断層の位置関係、形状などから推定。 断層の長さから推定。 断層の長さから推定。説明文2.1.2(3)参照。

表2 関東平野北西縁断層帯主部の将来の地震発生確率等

項　目	将来の地震発生確率等（注5）	信頼度（注6）	備　考
地震後経過率（注7）	0.08－0.5	c	発生確率及び集積確率は文献6による。
今後30年以内の地震発生確率	ほぼ0%－0.008%		
今後50年以内の地震発生確率	ほぼ0%－0.01%		
今後100年以内の地震発生確率	ほぼ0%－0.03%		
今後300年以内の地震発生確率	ほぼ0%－0.1%		
集積確率(注8)	ほぼ0%－0.1%		

１．断層帯の位置及び形態

関東平野北西縁断層帯は、関東平野北西縁断層帯主部と平井－櫛挽（くしびき）断層帯からなる。

関東平野北西縁断層帯主部は、群馬県群馬郡榛名町から安中市東部、高崎市、藤岡市、埼玉県本庄市、深谷市、熊谷市、鴻巣市、北本市、桶川市などを経て、北足立郡伊奈町に至る断層帯である。長さは約８２ｋｍで、概ね北西－南東方向に延びる。本断層帯は南西側が北東側に対して相対的に隆起する逆断層である（図１及び表１）。

図１．関東平野北西縁断層帯主部のうち深谷断層の位置

平井－櫛挽断層帯は、群馬県多野郡吉井町から藤岡市、埼玉県児玉郡神川町、児玉町、美里町を経て大里郡寄居町に至る断層帯である。長さは約２３ｋｍで、概ね北西－南東方向に延びる。本断層帯は左横ずれを主体とし、北東側隆起成分を伴うと推定される。(図は略)。

２．断層帯の過去の活動

（１）関東平野北西縁断層帯主部

関東平野北西縁断層帯主部の平均的な上下方向のずれの速度は０．２－０．４ｍ／千年程度、最新活動時期は約６千２百年前以後、約２千５百年前以前の可能性がある。また、既往の調査研究成果による直接的なデータではないが、本断層帯の長さを基に推定した１回の活動に伴う上下方向のずれの量と平均的な上下方向のずれの速度に基づくと、平均活動間隔は１万３千－３万年程度であった可能性がある（表１、３）。

（２）平井－櫛挽断層帯

平井－櫛挽断層帯では、過去の活動に関する資料が乏しく、具体的な活動履歴については明らかにされていない。

３．断層帯の将来の活動

（１）関東平野北西縁断層帯主部

関東平野北西縁断層帯主部では、全体が１つの区間として活動する場合、マグニチュード８．０程度の地震が発生する可能性がある。また、その際には南西側が北東側に対して相対的に５－６ｍ程度高まる段差や撓みが生じる可能性がある（表１）。本断層帯の最新活動後の経過率及び将来このような地震が発生する長期確率は、表２に示すとおりである。

（２）平井－櫛挽断層帯

平井－櫛挽断層帯では、全体が１つの区間として活動する場合、マグニチュード７．１程度の地震が発生する可能性がある。また、その際には２ｍ程度の左横ずれを生じ、北東側が南西側に対して相対的に高まる段差や撓みを伴う可能性がある（表３）。本断層帯の最新活動後の経過率及び将来このような地震が発生する長期確率は不明である。

４．今後に向けて

関東平野北西縁断層帯主部は複数の断層からなる長大な断層帯であるが、副次的な断層である江南断層以外は活動履歴に関する詳しい資料が得られていない。また、平井－櫛挽断層帯では、過去の活動に関してほとんど資料が得られておらず、将来における地震発生の可能性を評価することができない。したがって、これらについての精度の良い資料を集積させて、活動区間を明確にし、最近の活動履歴や平均活動間隔を正確に把握する必要がある。

また、関東平野北西縁断層帯主部と平井－櫛挽断層帯は地下で収斂するとの指摘もある。よって、断層の地下深部の形状等についてさらに調査を行い、本断層帯で発生する地震の姿を明らかにすることが重要である。

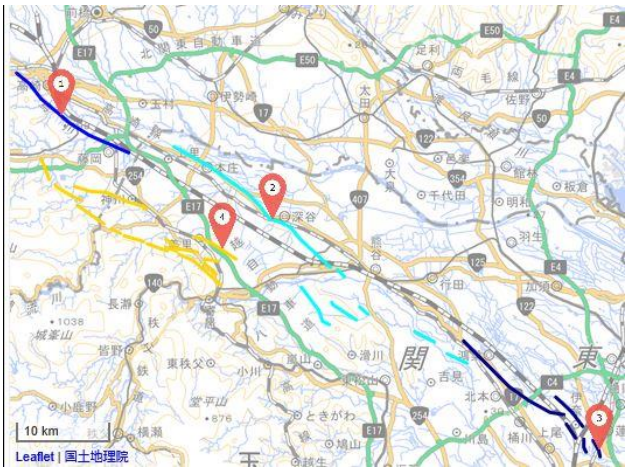

図２　表３の各断層の位置

活動セグメント番号	活動セグメント名	一般走向	一般傾斜	長さ[km]	断層型	変位の向き(隆起側)	平均変位速度[m/千年]	単位変位量[m]	平均活動間隔[千年]	最新活動時期(西暦)		地震後経過率	将来活動確率 (今後30年以内)[%]	
										野外調査結果	対応する内陸地震		BPT分布モデル	ポアソン過程モデル
3 066-01	高崎	N 50°W	45 ° S	26	逆	S	0.4	3.0	7.6	～ 128 年				0.4
2 066-02	深谷	N 50°W	45 ° S	38	逆	S	0.4	4.4	10.0	-4120 ～ -809 年		0.43	0	0.3
3 066-03	綾瀬川	N 50°W	45 ° S	19	逆	S	0.1	2.8	39.0					0.08
4 066-04	平井	N 60°W	45 ° N	23	逆	N	0.1	1.7	13.0	-4530 ～ -3860 年		0.49	0.01	0.2

表３　関東平野北西縁断層帯主部と平井－櫛挽断層帯の活動セグメント